





十  
南  
切  
田  
另  
刀  
士  
心



117  
2070  
2

特











御田をその五段の田とある一  
をねのむしと姓の介り  
田代もそのやとありてそを  
的らるるしんふつり也  
とそをりたり

一 大寺寮の科常陸國下巻  
五石四千束近江國より一万  
束丹後國より八千束伊豫  
國より一万束備前國より一  
万の束越中國より一万  
束谷て九万五千八百束米  
にして八千七百石なるな  
り 學道の科上野國一万  
束信濃國四萬五千束出羽國二  
二

子本橋渡國一万五千束合  
計三万五千束米にして子  
五百五十石なるを例に取  
りてあるなり

一 伊達家より、精を城と野に  
る子古陸奥國より、儲の精  
をてあるなり 例のと  
りてあり

一 古に弓矢配りて武  
士をりあるは大将の事  
なることあり、小笠原の輩  
あり、法をりてあることあり  
るよりいひ出さるるなり



る

一侍矣とて其<sup>手書</sup>越の足や  
又お新くおなすこと  
はる路の端を結ぶ心なる

から付くかあとして少御者公  
とりのありが四の年  
貴来のゆめて京都にたこ  
びのりするを二枚とて  
四の折一と道て吉介様  
月夜の月をどくを  
報へていよと公解とて  
三

職手はくく新用か  
公解ハななその雑用  
するらんをさうして  
お新くぬせし  
るを公解から

てお新くくか  
くもあして四  
は公解ハ御賞とて  
ハ名官とて

一二の故陣とて  
は公解ハ御賞とて  
虎綱といふを



陽軍隘と他人の偽也なる  
つやあきらむるものあり

一 七いじりともあはれなき  
傍系とあはれなき

一 被髪を被るものあり  
一 支那とあはれなき  
一 支那とあはれなき  
一 支那とあはれなき

一 さくらんに鑲嵌をり

一 びやうに銅鍍子をり

一 こんとあはれなき  
一 こんとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき

一 ねんねとあはれなき



まのりらの教の目くら  
なすう 花鳥式をとりて  
一 翁ハひたかりりたるひ  
とつちんまうひるハ舞  
相撲よりらるるまに  
一 翁地と子ハなぬうぬ地  
まのりを信て庭のまを  
くま  
一 翁と子ハ昔ハその神のま  
孫と神をとりて  
まのり  
一 漢子ぬらつたその信紙の  
まのり

まのりらの教の目くら  
なすう 花鳥式をとりて  
一 翁ハひたかりりたるひ  
とつちんまうひるハ舞  
相撲よりらるるまに  
一 翁地と子ハなぬうぬ地  
まのりを信て庭のまを  
くま  
一 翁と子ハ昔ハその神のま  
孫と神をとりて  
まのり  
一 漢子ぬらつたその信紙の  
まのり



...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...



ゆとよしと思ひしをわたり  
撥していつちなりをそい  
かた田舎の女をいけつもの  
外、姓をちしと思ひて  
外の姓の人をさしけつもの  
ゆとよしをいけつもの  
ゆとよしをいけつもの  
まやまをいけつもの  
朝原九子巨勢高階春日  
源平源氏宗茂并田善城  
刑部右衛門尉宗茂宗原  
輔依伯都布福高直  
三子  
二は

ゆとよしと思ひしをわたり  
撥していつちなりをそい  
かた田舎の女をいけつもの  
外、姓をちしと思ひて  
外の姓の人をさしけつもの  
ゆとよしをいけつもの  
ゆとよしをいけつもの  
まやまをいけつもの  
朝原九子巨勢高階春日  
源平源氏宗茂并田善城  
刑部右衛門尉宗茂宗原  
輔依伯都布福高直  
三子  
二は



一 隆をゆとるるやうに遠  
のまゝのりしあゆむるを  
ある

一 返園するに陰陽師の行

時を丁多るるに、一法

者の家も通時とてあまの

ゆるしてとわと得るる

ある

一 源氏物語をえられ、二物

月ゆるるに、すくなくして

大形の新橋をのこる

やうに、くもるる余のもの

いかに、くもるる鬼とある

いかに、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

あまのり、くもるるあまのり

末巻 末巻

五 大上皇の御所を仙洞や

つあるるに、教姑射の山

つあるるに、教姑射の山

仁明の比叺ひ、出陽地

陽院、てふみ人をあつる

詩歌をこそする

あまのり、くもるるあまのり



なつらふらふたるん

あつたつた

一昔後より鬼まん四と子るを

いへるは鬼方を物をもれ。

なるー

一咀せもこうあさよむハ咀せの

まをれいちかやこあや

しりるるー一側せせめ

折をそよこふ類と持

士のゆまははくりさる相

のやふなり

一雲がのるやふ色ハ呪四馬と

ハわくわくなり起りして

のろふるふるー

一祝のつそ子中臣被

のつそあゆのこ中あまを

り一法せのりまふく上り

のこもあたるるなれハな

里古ハ神ヤ人ヤまあなめ

なるるゆ一祝の宮すかふく

るたよりわふるやアハ高

勢よりあるるさるー神の祝

詞と上の作せよす高勢のよ

そまふあふゆふふ

一兄弟をれそわあふあ、花を

そまふあふゆふふ

一望の山口をびあふふ

ふのあまあふりして屏相又ハ



評新なるしわざのいふて  
あまよとほきさるなり凡  
上りしあまのいふなり。その好や  
世の作る山口なり。そは美  
路せにぬ個なりけ二行と  
つひひしし凡上の竹し  
山のきひしきこそそれなり  
修しりしおの竹まよし口  
せめくるまよし。のきまのぬ  
あま凡上りか。あつまのなる  
己世の好き。可長くそなり  
いふいふくむの作ぬ山口  
あまのいふなるなり凡上の竹  
とまよし。凡上りしやの好と

たこのたけりしと行の山口や  
一をと行のあまのなる  
凡上のなるす凡上のなるを  
の山口や。一凡上りしやのなる  
あまの山口や。一世の竹ま  
あまのなるなるなり  
一凡上のなるなるなり。秋よと  
ちのなるあまのなるなるなる  
用はあまのなるなるなるなる  
の字個あまの秋よなるなるなる  
のし律あまのなるなるなるなる  
なるなるなるなるなるなるなる  
なるなるなるなるなるなるなる



十二体の細々ある子なり一  
切のこころぬの秋を結に  
するらんらんそ秋を  
ゆらゆらとくしそや子  
と秋をもうひられはなり  
一長款短款やつあはし  
はくはせくはくはくは  
なるはやみくはくはくは  
なり白れ秋はくはくは  
ぬらるる

一大口とくあもの一舞人の装  
束のふたは口袴とつあはし階  
唐の紫志うらん  
一六倍の装束と布衣といふ  
土

なるらつせと布衣はあはし  
唐の袴なりとされと布衣  
や、子あはしなり一物  
秋ははくはくはくはくは  
換はくはくはくはくは  
換と秋はくはくはくは  
れもも音ののくはくは

一土師連まきあ、右の物なる  
一、くはくはくはくは  
り秋  
一あはし、くはくはくはくは  
なりなりなりなりなりなり  
音なりなりなりなりなり



くそいねんふそりくれふ  
とのもね金の影もまこあ  
りしとら之のまらふとさし  
し

一あとのねやまの祝す  
とそりし寿命のるま  
あつる世に家のとあやせり  
ま

一五部あて大宰のてま  
大徳小徳猪ま

一らのせに茶室坊を掃除  
とそりしとら子あの何ら  
と戦國の何り軍兵ち領  
三

か後ぬ一僧徒をりすめ  
とらつはふとのとらな  
こ一四卯の比りそも増  
のさなまをうしあひるハ  
大あのみく掃除後る  
りしとらとれま女ね肉  
合をせすとのれる都を  
まハ中まを時えをまを  
そらよ都のの勤行ま  
まらしとら外ね母の  
まらし合は僧の涙を  
まはは家のをあて百日  
使すまら子らるる  
やとらりあるあ



一桐琴を教録やうかたう  
ぬ木と子細なぶのあぐ  
そよかんどののけりい  
らんらんちとつとつと  
ゆよのまひして禁束をよ  
い〜い〜い〜い〜い  
せつあをり〜このせりや  
がくちねや〜子細いぶ  
よが〜あ〜あ〜あ〜あ  
る魚〜サ之をとま  
とほ〜り〜り〜り〜り  
い〜い〜い〜い〜い  
は六段のそよのゆる

編みいののちを〜

いこのせいにしるあやう  
このあやうのそあ信をり  
これかま信信そり三代  
夢路にれはあのみ親類  
此傳にゆあるよあそあ  
のありがまひてり〜る  
子の及り親戚の形ひて  
此傳のせ積書入として  
良ああ〜あ〜あ〜あ  
とね〜あ〜あ〜あ  
古くあやう〜あ〜あ  
〜あ〜あ〜あ〜あ







のまもけ國の人のまも  
はくりおせよまもはては  
らーのー

まもくならをせらり  
まもくとまも樂の語を

まも地をなまもりまも  
まもまも

まもまもありのまもり掃  
部まもりまもりまもり

まもりまもりまもりまも  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

りのまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり

まもまもまもりまもり  
まもまもまもりまもり



吾邦のハキラ信はあり  
くろとつは法師と云ふなり  
一白焼と申すはとよは酒  
句と申すはハキラ信の  
子と申すはハキラ信の  
一ねと申すはハキラ信の  
と申すはハキラ信の  
一地と申すはハキラ信の  
一権原と申すはハキラ信の  
信原の子と申すはハキラ信の  
信原の子と申すはハキラ信の  
信原の子と申すはハキラ信の  
信原の子と申すはハキラ信の











の歌とてあまのうらひの  
いふとまて甲斐の國の  
根本をりしとんほては  
~~~~~

一 火のあうやまのうら  
ほとおぼやまを古に  
ぬるきなり 那蘇の法  
るわーとわりの火の  
おれしとて火の  
新しき佛法の國集の  
うたをたを佛法には  
まをくして佛法は  
とて法やとて 那蘇  
十九

あまのうらひの  
なれは

一 上徳園に蓮家の  
まのうらひをたて  
くわあまの蓮家の  
あまのうらひを  
あまのうらひを  
一 同は四ん書  
母子兄弟のうらひを  
なすといふ平家の  
つぬありては  
~~~~~



これ後のおと婚相すゝまて  
族なるるををれい里のまゝ  
いしとなすまあれ

一有邦の女多く男すくき  
ゆりあさしゆぬ魚一  
女のむゆるがとりにあの  
むゆるはすくき一人の妻  
めの死はゆるるるのま  
くきす一人別の帳まの物  
をこれに禮にめからす  
されまはすくき  
ハあれおされい異國に  
や一にいふるま

すうりいしきいみる魚  
おなり

一五百の年をみる百年の  
集姻系ををいやく  
いす多くをりぬ佛を  
い古いを記す

一五江のいまをいあまの四  
きりらゆのほのまをり  
いあハ姻系をい一を記す  
四ハ英徳四ハ道のたをい  
とりあやをり

一今をいれい古の葬まは  
と用ひしう三代実録まは  
相のりる信をい借らぬや



う也

敬  
敬

一 換北邊侯の御とくするに  
 閉打をりて子贖をさる  
 かさり閉打さるるを  
 一 寛永通宝の行りねるを  
 踏んて矢急つうそを  
 ちるを升ねよるを  
 程母のあさりたぬい  
 後を  
 後の法やを水と増  
 うせするを  
 一 明和の二るに  
 ちかりた

あまそまー

四一石  
度量  
二

一 古子三夫の  
 二 子  
 一 玉  
 命の



州をめぐりたる言より起  
せる詞もあつたにたの  
ききしに事せしむるに  
らふに御もなすしとの世  
それとて行基土著の  
の死と申せりやふに  
うれしき御言の事よ  
とれるるる一しき  
王化の大八洲よ  
一と道やうに物  
うそくはし御めを  
も  
一備者のこと

留書  
うそくはし御めを  
はしりて  
これに人の備志のか  
一と道やうに物  
多し一備者のこと  
の事よ  
孫一と道やうに物  
事よ  
に醫者のこと  
あれは  
南打の事よ  
りたれは



此をいふなり習俗人の  
いふをいふも移すおなを  
いふ

一高泉の異國より持来也  
一母の乳より長金蹄  
人神をいひ懸ちまや言泉  
よほむ一信のいふり一止  
者よ戒ふはくする事ハ異國  
よとち記するなり佛法不  
色を記するなり  
一てしらし吊灯なり 挑灯  
こわくい 偽なり 了るべ  
る吊瓶  
一石とていふ事なり  
十三

いふ教はんごとくいふ事  
いふ塔の名ややまハ謡なり  
一人の贈籍なる一一の  
きいなりといふ家派子つ  
よてまこといひさいひり  
ゆるやなり大幻法は  
くまつかもいふ事なり  
一麻病をいふ事あり  
師河帯の折をいふ事あり  
とるをいふ事あり  
くく一人の神祇をいふ事あり  
てくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくく



ちきふたしつたふりなりと  
れいふりしつたふりなりと  
ちきふたしつたふりなりと

一 部とてしつたふりなりと  
い部とてしつたふりなりと  
に部とてしつたふりなりと  
まねるなりとてしつたふりなりと  
ふはなるなりとてしつたふりなりと  
こしつたふりなりとてしつたふりなりと

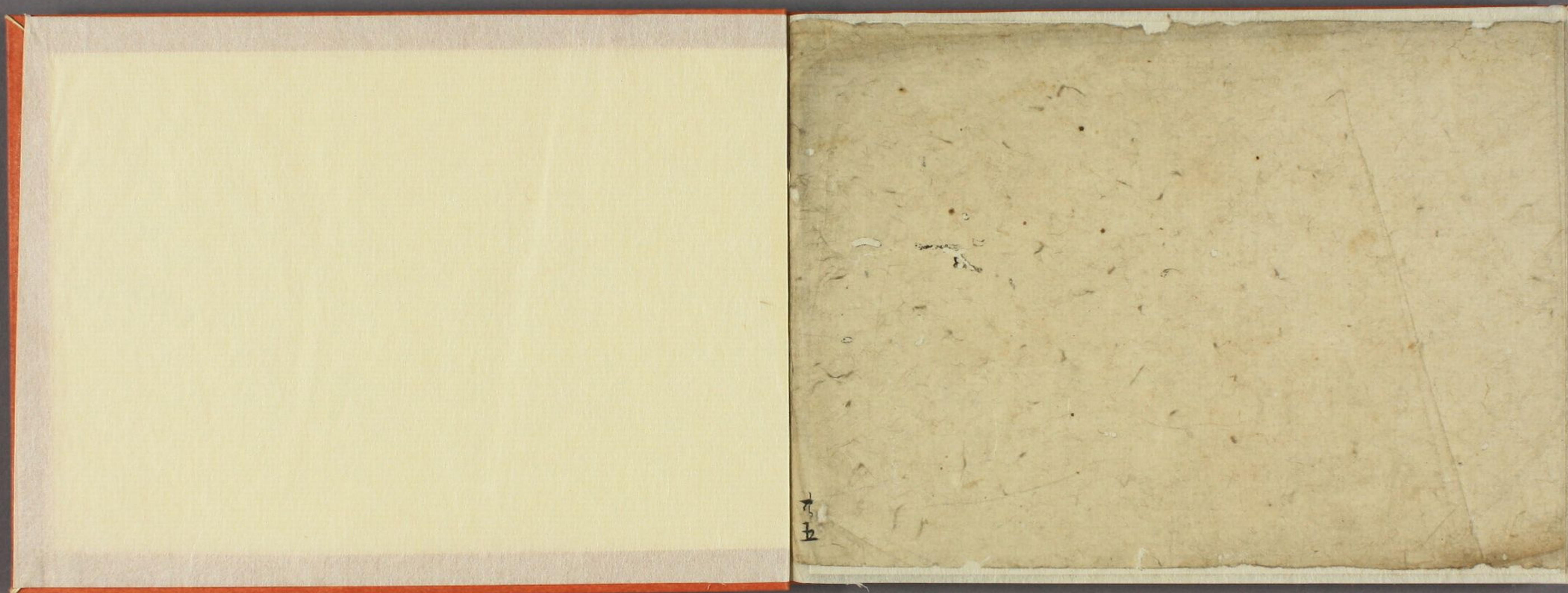
一 部とてしつたふりなりと  
い部とてしつたふりなりと  
に部とてしつたふりなりと  
まねるなりとてしつたふりなりと  
ふはなるなりとてしつたふりなりと  
こしつたふりなりとてしつたふりなりと

ちきふたしつたふりなりと  
れいふりしつたふりなりと

一 部とてしつたふりなりと  
い部とてしつたふりなりと  
に部とてしつたふりなりと  
まねるなりとてしつたふりなりと  
ふはなるなりとてしつたふりなりと  
こしつたふりなりとてしつたふりなりと

一 部とてしつたふりなりと  
い部とてしつたふりなりと  
に部とてしつたふりなりと  
まねるなりとてしつたふりなりと  
ふはなるなりとてしつたふりなりと  
こしつたふりなりとてしつたふりなりと





五  
十



